金剛峯寺大主殿：江戸時代 県指定文化財

明治元年に学侶・行人・聖の三派が廃止され、学侶方の総本山の青巌寺と、行人方の総本山の興山寺が合併して金剛峯寺となった。現在の境内には、青巌寺時代の大主殿、経蔵、鐘楼などが残り、かご塀で囲われている。これらの建物は、万延元（1860）年の大火後、文久元～3（1861～3）年にかけて再建された。

真然堂（真然大徳墓） 県指定文化財

真然堂の解体修理に伴う発掘調査で、平安時代後期の塔基壇から緑釉四足壺が出土し、下層からは平安時代前期の台状墳墓が発見された。製作年代から四足壺は下層の台状墳墓に伴うものであり、文献等の記述からこの四足壺は高野山第二世真然大徳の骨蔵器と考えられる。四足壺は塔建立時に墓から取り出され再度埋納されたと考えられる。

宝性院跡（教化研修道場建設に伴う発掘調査）

室町時代、江戸時代の建物跡が発見されており、「宝性」と墨書された漆塗椀が出土した。発掘調査で検出された建物跡は宝性院に関連するとみられる。調査地には 70 cm以上に及ぶ火災整地層が存在し、大永元（1521）年の大火後に大規模な土地の改変が行われたとみられる。また江戸時代の建物再建に伴い、5 枚の皿を載せた折敷を四方と中央に埋置する「屋敷地取作法」跡が検出された。

金剛三昧院客殿及び台所の保存修理工事と発掘調査

金剛三昧院は、源頼朝の菩提を弔うために北条政子が創建したとされており、境内には国宝に指定されている多宝塔のほか、重要文化財の経蔵、四所明神社、客殿及び台所と、多くの文化財が残されています。今回、客殿及び台所と多宝塔の檜皮屋根が耐用年数を越え、また建物全体の傷みも大きくなってきたため、平成 20 年 1 月から 5 年間の工期で保存修理工事が行われることとなりました。この修理工事を行う中で、客殿及び台所の床下から、現在の建物よりも古い時代の建物の遺構などが現れたため、平成 20 年 10 月から 12 月にかけて発掘調査が行われました。

客殿は賓客を迎え、法要を行うための建物、台所は僧侶が生活を営むための建物です。現在の客殿及び台所は、江戸時代前期（17 世紀前半）頃に建てられたと考えられていますが、正確な年代はわかっていません。

今回の発掘調査の結果、客殿及び台所は現在の建物が建てられる以前に、3 度建物が建て替えられた時期があることがわかりました。主要な建物の位置は現在とほぼ変わりませんが、改築の度に北西の山裾を削平したり、北東の谷間を盛土整地したりして、徐々に建物が北側に拡大していきます。

宮殿及び台所の発掘調査状況

また発掘調査で、土室と呼ばれる高野山独自の暖房装置の礎石が確認できたことによって、かつては土室が存在したことや、それが何度か改変された後に撤去されたことなどが判明しました。この結果は、建物の変遷を理解する一助となりました。

賢瓶出土状況

さらに発掘調査によって、現在より一代前の建物を建てるときに埋納されたと考えられる、賢瓶と呼ばれる金属製の小型の壺や、土師器皿、古銭などが発見されました。賢瓶の中には五宝、五穀、五薬、五香が入れられ、これらは地鎮供養を行う際に埋められます。賢瓶は、高野山では大門の発掘調査などでも発見されているほか、県内の根来寺でも数例見つかっています。ただ、全国的に見ると出土例が 10 数例と少なく、貴重な発見だと言えます。

解体修理工事は、建物の歴史を深く知ることが出来る、絶好の機会です。また、建物の歴史を深く知るためには、今ある建物だけでなく、それ以前に存在した建物についても知る必要があるため、発掘調査が重要になってきます。つまり、文化財建造物の修理と埋蔵文化財の発掘は、切っても切れない関係なのです。